佳作

『桜の森の満開の下；白痴：他十二篇』坂口　安吾著

文学部　文学科 3 年　　工藤　奈津子

―カタルシス―。

一般的に「精神の浄化」として説明されるこの言葉を私はもう少し掘り下げて自分なりに解釈している。それは「リセット」そして「再スタート」の言葉である、と。苦しい日常の中で迷い嘆き縮こまっていた感情が、この「カタルシス」を経験することで、大きく新鮮な空気を吸って胸を張り、力強く前を向いて、昨日とは違う新しい自分だと一歩踏み出せるようになる、そんな過程を表す言葉だと思っている。私たちはみな無意識のうちに心のどこかで「カタルシス」を求めて本を読み、映画を見、舞台を見る。しかしそんな体験ができる作品はどこにでもあるわけではない。だから今回私は数多くの本やドラマの中からこの「カタルシス」を自身が体験した特別な一冊を紹介したいと考えている。

『桜の森の満開の下; 白痴 ： 他十二篇』。表題作と他 12 作の短篇からなる本作は、敗戦後まもない日本で若者から熱狂的な支持を獲得した「無頼派」坂口安吾の著である。名作「桜の森の満開の下」や「夜長姫と耳男」は古典作品を踏襲した内容で、グロテスクな狂気性と妖艶な美しさを両立した異様な世界観を持つ作品である。そこで「夜長姫」は言う。「好きなものは呪うか殺すか争うかしなければならない」と。この言葉に表れた猟奇的で凶暴な叫びは、それでも間違いなく人間の心の中の一つの真実である。誰もが眼を覆い、顔を背けてしまうような心の奥底に、安吾は光を当てようとするのである。

読者はこの物語の中で常に問われ続ける。あるときは若い女、あるときは年老いた男に。「生きる」とは何か、「愛する」とは何か。私たち読者は突きつけられた問いに対する答えを求めて慌ててページを繰るだろう。そして彼らの熱狂的で一瞬の、命を燃やすように刹那的な「生」に巻き込まれ、右も左もわからぬままどろどろに溶けてゆく。

また同時にこの作品は他の何物でもない、戦争の物語だ。代表作「白痴」や「戦争と一人の女」、「アンゴウ」では、全てのものが「戦争」という圧倒的な暴力と破壊の中に呑みこまれてゆく。男も女も子供もそこにあった慎ましい生活も大切に守られていた思い出も全て。暴かれ、奪われ、破壊され、失われる。そしてその嵐が過ぎ去った後には、瓦礫の山が残る。絶望の中で彼らはそれでもそこに一筋の希望の光と、手のひらの上のちっぽけな「愛」を見出してゆく。彼らの眩しいほど一瞬の輝きを放つその「生」の物語、読後きっと誰しも静かな余韻を味わいながら、深く思考せずにはいられないだろう。身を焦がすような刹那的な「生への情熱」、狂おしいほどの「愛」、その確かな真実の感触を確かめながら。

以上のように、当作品は今までにない至高の読書体験を約束する珠玉の一冊である。ぜひ一度、手に取ってあなた自身の「答え」とは何なのか、そして「カタルシス」はそこにあるのか、確かめて素晴らしい読書体験を経験してほしいと私は切に願っている。